

中島端『支那分割の運命』とその周辺（一）

—アジア主義者の選択—

後藤延子

キーワード・アジア主義、中島敦、中国分割、李大釗

6. 中国分割に日本は参与すべきか否か

中島端『支那分割の運命』は、上篇で辛亥革命直後の中国の現状分析の結果、分割の運命が必至であることを指摘した。だとしたら、地理的・人種的・歴史的に関連の深い日本は、それに対処するにいかなる方針を探るべきか。これが下篇の主題である。先ずその構成から見ておこう。

第一章「東亜のモンロー主義」、第二章「日本帝国と支那分割」、第三章「日本と支那分割の方略」、第四章「日本と支那分割の究明的利害」は、日本が中国分割に参加すべきか否かの検討に充てられる。第五章「日本帝国百年後の運命」、第六章「日本の教育」、第七章「日本の産業」、第八章「日本の陸海軍」、第九章「日本の外交」、第十章「日本の憲政」、第十一章「世道人心の一大危機」は、明治維新以来四十五年間の日本国内諸方面の現状分析に充てられている。そして第十二章「日本帝国民の覚悟」が結論に当り、そこで日本国民への提言が述べられる。

さてここでは先ず、第一章から第四章までの中島端の主張、及びそれに対する『駁議』の反応を見ることにしたい。ところで中島端には、既に『近世外交史』（明治二十四年、自費出版）の著述があった。そこには、ペリー来航以来の日本の対欧米外交史が、強い憤り

懲と屈辱感を以て詳しく振り返っていた。と同時に、明治二〇年、二十二年の井上馨、大隈重信の条約改正交渉の妥協・屈従ぶりへの悲憤慷慨が述べられていた。よって国権の回復、関税自主権回復による国力の伸展を速やかに実現するには、四千万国民と「廟堂諸公」が、力を合わせ知恵を尽して、努力奮起する以外にはない。中島端は、「先輩國士の風」にならって、「草莽の一書生」のやみがたい真情を表わして、それを訴えんとしたのだと言ふ。

この『近世外交史』では、中島端は「弱肉強食」の社会進化論を当時の國際情勢認識の枠組としていた。だが、『支那分割の運命』の頃になると、下篇第一章「東亜のモンロー主義」の名が告げるよう、黄白人種対抗の視点が新たにつけ加わっている。勿論これは、日清戦争後、全世界で流行した人種論の所産であり、日本でもこれに拠り黄種連帶論を説く人が多く現れた⁽¹⁾。中島端もその一人に他ならない。よつてその文中に、「同洲」「同種」「同文」「唇齒輔車」などの言葉が氾濫することになる。そこには、日本も中国もひとしく「白人東漸の勢」の下にあるとの、一蓮托生、運命共同体的認識がうかがわれる。

だが「東亜モンロー主義」は、もはや実現の可能性はない。アジア諸国が白人種から次々に亡ぼされて、最後に残ったのは、中国と日本の二国のみである。そしていま、中国の分割は不可避の危機にある。内部からの「土崩瓦解の象」のみに止まらず、今は実に、

「分割の機は、已に欧米人の掌中に在」る。中島端はこれを嘆く。何故ならば、「支那の分割は、独り支那一国の存亡問題に止まらずして、東亜厄運の伏する所たり、又我が帝国安危の繋る所なればなり」である。

中島端が上篇で、中国人をあれほど激しく罵倒したのも、要するに分割の危機に瀕している、中国の前途への憂慮に出るものに他ならなかつた。従つて中島端の主觀的意図が正しく受け止められず、「駁議」の作者たちの怒りを買つたのは、彼にすれば全く心外なことであつたろう。だが中島端の場合、中国への愛情は否定しはしないものの、それよりも累が日本に及ぶことへの懸念の方が、まさつていたことも事実であつた。これを確認しておく必要がある。

さて第一章で、中島端は、ロシア、英國、仏國、ドイツそれぞれの、中國分割進行の予想コースをシミュレーションしてみせる。その各国の「用兵」の予想コースは詳細にして具体的であり、中島端が中国の地理、交通の情況について精密な情報を掌握していること、また中國史上の攻防戦略に関する該博な知識をもつてていることも示している。勿論、中国蚕食は軍事によるものだけとは限らない。それに並行する「経営商戦」も、また有力な武器であった。

ところで中国を狙う諸列強の中で、唯一つ、「用兵」の手段を用いない国がある。それは米国である。中島端は、その対外政策が一変し、「本来純平和の共和國民」であつた米国が、ハワイ、キューバ、フィリピンを併合して、「戦を他人に挑む狂暴國民」に変り、更には「霸を東亜大陸に争はんと」して、いることを指摘する。

米国は「豊富無限の資本」の投下先を求めて、日露戦争の講和斡旋に乗り出して、「満州鉄道の中立」を提案した。その提案は拒否されたものの、更に義和團事件の賠償金を返還し、アメリカへの留学

生養成費に充当させ、パナマ運河の開通を急ぐなど、着々と準備を進めつつあると、述べる。この米国の中国大陸進出の野望を指摘し、その危険性に注意を喚起したのは、当時の日本の論壇では、最も早いものに属するだろう。

一九〇二年以来、日本の同盟国であり、一九一一年七月に三回目の日英同盟協約を改訂した英國について、中島端はどのような見方をしているか。中島端は、ロシアの南下を阻止してインドを守るために、イギリスがチベットに進入することを既に予想していた。果してイギリスは、「西藏の本来支那の藩属を知れるも、尚且北京政府に交渉する迂策を取らず、單刀直入、急に拉薩に侵入し、達賴喇嘛の喉を扼して、将来半属国たるの約を訂せしめんとしたりし」のである。そしてチベットから四川に入り、北へ、東へ、南へと手を伸ばし、既得の勢力圏、租借地、割譲地と結んで行けば、いすれば「中原を割きて一大帝国を建立せんも、必ずしも万不可能の事にはあらず」と言う。当然、そのプロセスには種々のタイプの統治が出現するとしても、インドもそうした糾余曲折の末に領有したのである。

中島端の英國の他国侵略のやり口の巧妙さ、非情さの指摘は、極めて具体的である。英國は、「用兵的侵略は、彼が所長（長ずるところ—後藤注）にあらず」ではあるが、必要な時には武力行使も辞するものではない。中島端によると、英國の「対外の政策行動は、一に算盤上の数字如何に在るのみ、豈一分の俠氣と名譽心あらんや。体善く言へば、英人は紳士の風采と、商人の手腕とを兼ねたる者なり。悪様に評すれば、英人は姦商の心術と斬取強盜の度胸を具する者なり。彼が算盤の裏面には、必ず弾丸を装填せりと云ふは、証り冤たることを免れじ」と評される。

従つて日英同盟も、利害の打算に基づくもの以外ではない。むやみに信頼していると、「他日手中の油揚の、鳶に攫み去らるゝ時なきを保せず」の結果になろう。

さてこの第一章「東亜のモンロー主義」は、列強の行動をいちいち述べ立てたため、相当な長文になつた。よつて、『駁議』も四つ付くことになつた。先ず一つめは、モンゴル一帯が早晚ロシア人の手に入るとの、中島端の予言が的中して、一九一二年十一月三日、「俄蒙協約」⁽³⁾が結ばれたことについてである。北洋法政学会の同人達は、これに驚き且つ憤慨して、「暴俄」と一戦を交じえ、領土回復の決意を披瀝する。その上で、中島端の傍観者的態度が、他人の不幸を喜ぶ者として非難される。

『駁議』の二つめは、イギリスの侵略意志の否定である。商業重視の英國は、「素より保全を重んじ」ていた。今回のチベットへの進入は、日露の野望により、勢力均衡が破綻するのを食い止めようとした行動で、自發的に起したものではない。⁽⁴⁾ 中島端は他の列強の企図をあげつらうが、中国分割の張本人は、英でも米でも仏でもなく、「惟だ暴俄となんじの島国のみ」と、強く切り返している。

三つめは、中島端の、フランスが侵略の後楯として、カトリックの布教を利用して手口についての指摘を、深刻に受けとめたものである。『駁議』は、国民教育を普及し、外国人の術中に嵌まつて侵略の口実を与えないよう、「教民」に愛国を知らしめる必要があると述べる。

『駁議』の最後の四つめは、第一章「東亜のモンロー主義」全体に対する総括的論評である。論点は二つである。一つは、中島端が、歐米列強の中国侵略策を詳述し、悲憤慷慨しているが、日本については一言も触れていないことである。だとすると「東亜モンロー主

義」とは、「日本が独りで中国を呑む」ことを指し、それが不可能なので慨嘆痛哭しているだけである。中国に対する愛情・共感など、初めからないと決めつける。

もう一つは、「強弱相遇うに公理なし。國際間の道徳なきは、勢い然らしむるなり」との、國際間の赤裸々なパワー・ポリティックの現実に開眼したことである。革命の成功に有頂天になつてゐるときに、分割の危機が切迫していることを知らされたのは、「棒喝の警となすに足る」ものだと評価する。

中島端が日本の中国侵略に言及しなかつたのは、それを知らぬふりをしてすませるためではなかつた。第二章以下、日本の中国分割に対して採るべき方針を検討するまで、論の展開の都合上、敢えてひとまず棚上げにしたものと見てよい。なぜなら、上篇第十章「支那の運命」で既に、「日本の台灣を取りしが如き、即表面的分割なり」と述べ、分割の分け前にあづかっていることは認識済みだからである。

さて「東亜のモンロー主義」は、中国の分割が目前に迫つている以上、実現の可能性はない。だとすると、日本はいかに対処すべきか。「全く分割に与らざらんか、進みて分割に与らんか」、二者の内、いずれを選ぶべきか。

下篇第二章、第三章は、もっぱらこの問題の吟味にあてられる。第二章「日本帝国と支那分割」では、中国分割の機運はすでに義和團事件の時に兆したが、その実現が阻まれたのは、「我が帝国が支那の傍に在りて、一面は之を鞭撻し、一面は之を庇護し、隠然後見の地位に居りつればなり」であった。次にロシアの分割の野望を日露戦争の勝利で打ち碎いたがゆえに、列強は「日本の武力を憚り」、日本の領土保全の主張に同調したのである。

ところが、辛亥革命が起り、「支那民族の姑息苟安、怯懦にして胆氣なく鬪志なく、乱雑にして統一なく、空論を喜びて實際なく、團体の鞏固ならざる、愛國心なく、忠君心なく、犠牲心なく、一切の醜態陋態、一切の短處病處、一切の腐處壞處」が、全世界の前に曝け出された。ここから「支那人与し易し」の感が沸き起り、これが今回の分割競争亢進の引き金となつた。だが日本は、日露戦争のための巨額の負債に苦しみ、「是に於てか国民始めて戦を厭うの色あり」の状況であつた。

だとすると日本はいかなる道を探るべきか。ところで「兵力戦争の危險慘毒」に耐えず、「人道主義盛に行はれし」今の時代に、武力による分割を云々するのは、時代錯誤だとの意見がある。しかし、「今之列強も亦前の強国のみ」、その本質に変りはない。ただ「利害得失如何を問ふのみ」である。中島端は、「此後商戦独り世界に行はれて、兵馬干戈の慘禍、永く迹を人間に絶たんと云ふは、所謂似而非平和論者の謬想のみ。各国の軍備を全廃するは勿論、少くも軍備を制限するが如き、争でか今日に実行すべき。如しその日ありとせば、必ず五大洲中一覇国の出現を待たざるべからず」と、国際政治の冷厳な事実へのリアルな認識を示す。

更にその上、列強の分割に抵抗する力が中国の内部にはない。「漢族の外種異族の下に生息すること久し」く、五胡十六国時代より清朝に至るまで、「漢族は由來分割の歴史を見慣れし者」と、中島端は、得意の中国史の知識を延々と披露する。そして辛亥革命による青年の覺醒など何ら当てにならない。中島端は、彼等の「瓜分云々、外國干涉云々を呼号して、独立の意氣を衒ひ、國家国民の為めに心身を犠牲にするを惜まざるが如きも、特に一時の大言壯語に過ぎざるもの」と断言する。

従つて、中国の分割は、あとは実行の時機の成熟を待つのみである。だとしたら、日本は分割に参与すべきか否かの決断を急ぐ必要がある。第二章の『駁議』は、中島端の漢民族への侮蔑に耐えきれなかつたようである。眉批中にいくつか、同胞に、「漢族の男兒」に、「聴者」との呼びかけが見える。と同時に、漢民族の抵抗の史実を並べ、日本から与えられた度重なる恥辱に、他日決戦を挑んで復仇するとの決意を述べる。

さて日本はいかなる道を選ぶべきか。大陸から完全に手をひくのも一つの選択肢である。ただそれは、「既往の対外政策を根本より破壊すことである以上、「我が帝国上下の必ず甘服せざる所ならん」。日本の国威・國權の上から、經濟の發展の上から、大陸放棄が不可能だとすれば、「果斷実行」して、列強と「衡を中原に争はざるべからず」である。よつて第三章は、「日本と支那分割の方略」に充てられ、中島端は、日本の分割コースのシミュレーションを試みることになる。日本は南滿州を起点とする以外に方途がないとの制約の下、彼は史実を調査研究して、中国の南北両地方の地政学上の役割に注目した。

従つてそこから導き出された結論は、「用兵上より之を言へば、燕趙即今の直隸山西の地は、決して他人の手に委すべからず。財力上より之を見れば、江蘇浙江の二省は、決して他国の有たらしむべからず」との進攻要略であった。だが中國大陸には、虎視眈々と分割を狙う多くのライバルがいる。もし時機を誤れば、「二大厄運(5)」に見舞われることになる。「断じて之を行へば、鬼神も之を避く」と古語にあるが、「要是我が国是如何、國力如何に在るのみ」である。

ところでその「国是」は、と言ふと、当局も、民間の政論家も、

全国人民も、「独り十年廿年の将来に対する方針政策なきのみならず」、一二、三年、一年ないしは眼前の出来事に対しても定見がない。常に右顧左盼して変りやすく、列強の間において「独立特行の態度」がない。「國力」はと言うと、國民の勇氣はあつても財力はなく、外債の償還のため租税の負担は重く、物価は高騰し、國民全体が窮している。軍費を貸してくれそうな国は見当らない。

それゆえ、中国分割の作戦計画は、紙上の兵談、「書生の大言」にすぎないことになる。この章の『駁議』は、先ず日本が貧しく、中国に頼らねば立国できぬことを嘲笑する。従つて小国日本が自力で中國大陸制覇を図るなら、それは「蜉蝣の大樹を撼かす」ごときもので、自ら「敗亡の辱」を招くものだと言う。また今後の中国は、以前の中国とはちがうと、胸を張っている。千年の古国で、豊かな大国でありながら、列強の角逐を許したのは、三百年来の清朝の誤りのせいである。革命後の今こそ、その恥辱を雪ぎ、富強を達成すべく、努力の時である、と決意を述べる。そして、中国の「南北民族地理の特色」に極めて詳しい中島端が、「北方の武健」と「南方の富庶」が相互に補い合い、中国は中央集権が最もふさわしいと指摘しているとし、当時の中国で地方分権を唱える勢力を批判している。ここに「吾が国の浅識躁進の徒」が、革命党人を指すことは言うまでもない。

従つてこの章の『駁議』は、中島端の日本の国是、國力についての正直な告白を聴き、自國の優位性を確認できたようである。そして中島端の南北の各々異なる役割分担の指摘を、袁世凱による中央集権の達成、統一國家の樹立の論拠として活用し、自らの地方分権反対説を補強できたわけである。

ところで国是、國力とともに、中島端の評価では、日本は中国大陆

分割参与には不十分であつた。よつて参与は不可能ということになる。だが中島端は、たとい両者の要件が充たされたとしても、まず先決問題として、中国分割が「日本に利なるか、利ならざるか」に答えておく必要がある、との新しい問題を持ち出した。そしてこの問題への回答を探ぐるため、第四章「日本と支那分割の究競的利害」を執筆した。

さて第一章でも既に述べたように、中島端の世界情勢認識は、白人種の世界制覇の事業が遂に東アジアまでに達し、黄白人種の最後の衝突がそこで展開されているとのものであった。もはや独立の対面を保つてゐる黄色人種の国は、中国と日本だけである。そして今や中国は分割の淵にある。日本だけは「優勝の列」に居り、特別な存在と看做され、自らもそれを誇つてゐる。だが日本の地位の安泰も、中国が未だ滅亡していないうちだけである。白人種は過去の所行から見て、「全く異種族を殲滅し、異教徒を征服せざれば已まざるに似たり」。だとすると、いま白人種の嫉妬的になつてゐる日本が、中国分割完了後の次の標的になることになる。従つて中国の分割は、日本にとり極めて不利な事態をもたらすことにならう。

更にもう一つ、日本の中国分割への参加は、黄色人種同士の殺し合いに他ならない。明治維新以来、日本は欧米人に親しみ、歴史的に因縁の深い中国を重視せず、中国から、日本は遠交近政策を採つてゐると見られてきた。それは中国も同じで、日本を疎遠にし、遠交近政策を採つてゐるように見える。そして相互に憎みあい、けなし合い、双方とも口先では「同種同文」を唱えても、「彼我の心中、初より同種同文の恩愛あるにあらず」の不幸な関係になつてゐる。従つて、分割の時に至つて、もし日本が白人種の側に立てば、その怨み、憎悪が消える日はないだろう。

だとすれば日本は、五大洲の中に、「一の同種の国なく、一の同盟の邦なく、一の唇歯輔車、相倚り相扶くる者なく」、孤立無援の国となる。そして、「徒に目前区々の小利を貪りて、千年不滅の醜名を流し、百歳不悔の大患を招くことになる。よつて中国分割への参加は、日本にとり決して良い結果をもたらさない。

ところで以上のように、日本に極めて不利であつても、日本の参加・不参加にかかわらず、中国の分割はもはや止めようがない。だとしたら、日本はいかにすべきか。もし「後來支那を統一せんの絶大理想あり。而して又其徳其力、能く之を実行するに足らば」、日本は身を挺して中国の救済に乗り出すべきである。しかしそれが不十分な以上、日本の関与は共倒れであり、事態の更なる悪化を招くのみである。従つて、「支那分割は、我が日本将来厄運の始なり、百害ありて一利なし」に他ならない。以上が中島端の結論である。

日本には、確たる「国是」も、充実した「国力」もない。だとしたら、日本にとり「百害あって一利なし」の中国分割を手を束ねて見ておられるほか方法がない。日本には、中国に関わる資格がない。この中島端の結論は、極めて冷徹な合理主義的決断と言えよう。

さてこの章の『駁議』は、中島端の中国分割が日本に不利である、

分割への参与は断念すべきとの発言に、基本的に同意したようである。最近、日本で盛んに唱えられている、アジアモンロー主義とか、大アジア主義とかは、いかにも友人のようだが、「その心は盜賊」に他ならない。それは、「日本が東亜に独霸を希い図る代名辞」にすぎない。中国の興亡は、日本の興亡に連動する以上、双方は連帶し提携して白人に対抗すべきである。従つてそれがわかっているのなら、日本は「宜しく列強の間に折衝して、以て中華の進運を輔けるべし」と注文をつける。

だが『駁議』は、日本の租借地、植民地の返還を求めているわけではない。相互の提携とか、「列強の間に折衝」とか、抽象的な言葉を並べていてはすぎない。中島端は、分割に参与しないということとは、旅順、大連は租借地の期限が来たら返還するということだと明言している。だが、「台湾を取り」の台湾については、その遭遇策は曖昧になる。「滅し」た朝鮮は、「一九一〇年併合したことも手伝つてか、中国とは無関係の国と考えていたようで、一切言及がない。従つて『駁議』の側も、中島端の側も、議論は情熱的で、華麗な文言が並ぶけれども、具体的な行動方針が提起されるわけではない。若き法政学徒の革命成功の自信を背景にした氣負つた雄叫び、老いた憂国の漢学者の悲憤慷慨の饒舌、双方ともに言い放しの感がある。

とはいえた中島端の、中国分割から手をひけとの提案は、当時の日本の大勢から見て、勇気ある発言に属するだろう。中島端がこうした決断をした背景には、彼なりの日本の現状認識があり、深刻な憂慮の念があつた。次にそれを見ることにしよう。

7. 日本の亡国の兆候

中島端は、皇室尊崇の念が厚い、熱情的な愛國者である。その彼の眼に、当時の日本の現状はどう映つたか。「不世出の明天子」の下、順調に新興国として進み行きつつあるか、はたまた「亡国の淵に赴きつゝあるか」。これを一つ一つ確かめるのが、下篇第五章「日本帝国百年後の運命」から、第十章「日本の憲政」に至るまでの作業であった。従つて、『支那分割の運命』印刷中に、明治から大正に元号が変つたことに示されるように、明治最末年の日本の状況の総点検が行われることになる。

先ず天皇の輔弼の任に当るべき、賢宰相は見当らない。とりわけ伊藤博文は、南宋の賈似道と同じく、人格・品行をもて卑陋と指弾される。ましてや山縣、井上、寺内たちは言うまでもない。教育は、コセコセとして形式的に流れで精神がなく、普及の名はあっても普及の実がなく、「國民の道徳上知識上」何らの効果がない。そして、「哲理や、文学や、精神界の各門の如き、能く一代の思想を開拓し、一世の人心を指導する者」は見出せない。

日本の実業は、まだ農業国の状況にある。これが「将来一再変じて工業国と為り、商業国と為らんこと、更に二三十年後を期せざるべからず。國力富実の前途は、極めて遼遠」であった。日本の陸海軍は、「薩長私党の爪牙」であり、國民の税金の大半を費して、軍備の拡張を図るもの、ただ薩長二州の勢力競争に他ならない。

これ以後、外交、憲政、世道人心の危機的状況と、中島端の筆はますます冴えてくる。日本の亡国の兆候を微に入り細を穿つて暴露する、その舌鋒は鋭く、近代化の先頭を切り、「東亜の主人」として「最優の地を占め」ている日本人の弱点が、容赦なく抉り出される。上篇で中国人の欠点を衝いたのと同じ執拗な痛罵の刃が、今度は日本人に向けられるのである。「駁議」の作者たちにとり、これほど痛快なことはなかつただろう。また日本人読者にとっては、これほど戸惑わさせられることもなかつただろう。

さて「日本の外交」の章は、中島端の元來の得意分野であるだけに、事例は豊富で具体的である。日本の外交手段の幼稚のため、ルーズベルトの強迫的仲裁を受け入れ、小村寿太郎はロシアの要求に屈して、歐米人、更には中国人の軽侮を招き、日本の国威・國權を「九地の下に埋没せしめ」てしまつた。更にロシア既得利権継承のため、北京に出かけた小村は、お礼を言われるどころか、安奉鉄

道改良問題が持ち出され、余分な紛糾を招くことになった。

また辰丸（第二辰丸）事件の対応の拙劣さからこれがこじれると、林權助公使が、「北京總理衙門に怒号して、事如し決せずんば、軍艦幾隻を太沽に呼び来たらんのみ」と言うなどの、外交史上前代未聞の「粗暴の事」をなし、完全に信頼を失なつた。引き続いて廣東の日貨ボイコットが起ると、外交当局は狼狽してなすところを知らず。公使を急遽召還するなどの失態を起している。このように、日本本の対支方針は一定せず、場当たり的である。これは中国の実情を知悉せず、「切実に研究せざるに由る」のである。伊集院公使は、袁世凱に嘲弄され、それに気づかぬお目出度ぶりをさらけ出している。⁽⁶⁾

そして一九一一年改訂の日英同盟は、日米間の戦争の可能性を予期しての片務的攻守同盟となつていることを指摘する。⁽⁷⁾ 諸外国からの軽侮を招く「外交の萎靡不振」の甚しさを、中島端は慨嘆してやまない。

だが、「外交の事は、尚其の末」である。問題は内政である。立憲政体が実行されて二十余年、官僚閥族に阻撋せられ、「俗悪政党に破壊せられ」、今の状況で推移して行けば、憲政は顛覆され、「亡國滅種の禍」も到来するであろう。中島端は、その具体例を次々にあげて行く。そして、議員の買収、賄賂による籠絡に殆ど全員屈服する中、終始それを毅然凜然として拒否した人として中島端と同様の、「田舎漢」田中正造をあげている。

また、「立憲政治は輿論政治」であり、政党は輿論を実現する機関であり手段である。従つて政党は、「主義果して公理に悖らざるか、政策果して時宜に合へるか、果して輿論を指導し實現し得るか」の三条件がまず問わるべきである。それを問わず、「漫然御信任を云々す」るのは、御用政党であり、天皇を利用する「大不敬」

に他ならない。そしてまたそれは、政党の自殺行為に他ならない。

とりわけこの三、五年の政界の腐敗は甚しく、その中の人々は、「一切の悪徳、悪行兼ね具はらざるはなし」のありさまである。

そして憲政の腐敗堕落には、国民もまたその責任の一端を負つてゐる。立憲政治は輿論政治であり、輿論は、「国民の公是公非の意見」のことである。にもかかわらず、投票権を金銭で売る者は多く、値段の高い方に流れ、はては一人で二重、三重売りする者すらいる。これは「国民の不学無識」、「国民の無廉恥、無道心」のなせるわざで、日本国民は、「未だ立憲政治の何物たるを知らざる者なり。未だ立憲国民たる資格なき者」に他ならない。

さて第五章「日本帝国百年後の運命」から、第十章「日本の憲政」までの各章は、日本の各方面に弥漫している亡国の兆候を、事実をあげて列举し十分に説得力をもつてゐた。ところが第十一章「世道人心の一大危機」、最後の第十二章「日本帝國民の覺悟」になると、論調が一転して、中島端の評価、主觀的願望がストレートに露出することになる。『駁議』も第五章から終章まで、同一の主題で貫かれてゐるので、あとで一括して取り上げることにする。まずは「世道人心の一大危機」から見ておこう。

明治末年の日本で、「人心風俗の残忍冷酷」、「淫佚猥褻の風、游惰怯懦の俗」が極度に達しているとの嘆きは、ひとまず常套的であった。ただ中島端が、「今の社会、人心最深の根柢、最微の分子、亦一種白蟻の侵蝕を受けつゝある」を疑うのは、一つは南北朝正閏問題における大義名分の混乱、他の一つは忠君愛國の道義心の衰頽であった。要するに、「万世一系の皇統を奉戴」した、「君民一家の国体」を永遠に護持し、「我が民族の根本的主義にして、又原始的精神」である忠君愛國の念の動搖が、日本の世道人心の一大危機だ

と見るのである。

とりわけ、一九一〇年の幸徳秋水らのいわゆる大逆事件への、中島端の憤激は甚だ大きかった。彼は、「幸徳一輩、何物の鬼畜ぞ。日本民族の一分子を以て、敢て大逆不道を謀る。其本身の悖乱、固より人類を以て視るべからずと雖、豈明治昭代的一大汚点にあらずや、又即ち三千年来第一不祥の事にあらずや」と、嘗ての内村鑑三事件に比べて一層ひどいと、痛憤してやまない。

ここまで日本全国を蔽う亡国の兆候を並べ立ててきた中島端は、終章に来て、亡国の起死回生の道を「再三思索、更に大に恃むべき者あるを悟」つた。即ち不世出の英主、明治天皇に対する尊崇の念こそ「日本民族の特色」、「本性」である以上、日本国民を「提撕覚醒」させる人がいさえすれば、人々は「愛國志人」、「殉國義人」の本然の姿に立ち戻る筈である。よつて「何の」「國不祥の事あらんや」となる。彼は、「当局諸大臣」、「政友国民の両党」、「陸海軍人」、「貴族縉紳」、「富豪の徒」、「宗教家」、「教育家」、そして「五千万の同胞」に、「須く眞面目なるべし」と呼びかける。こうした絶叫に近い精神主義的呼びかけが、果して功を奏するのか。当人は、「野人の叫声も亦時に天啓の音あり。将来の禍福豈余輩の口より出でて、一世の耳に入る者なからんや。苟も一言当らずんば、余は甘んじて千死万死の刑に服せん」と、その経世家らしい大見得を切る。

そして「更に我が帝国の上下に告ぐ」として、分割の淵に喘ぐ中國への注視とその救済策とを訴える。中島端は、「天の人類に福する、白種独り厚くして、黄種独り薄きの理なし」である以上、日本人は今こそ、自己の天職を自覚し、徳を修め力を養い、黄種復興の決意をすべき時だと言う。そして、「侵略の念を以て人に臨むこと勿れ、侮弱の眼を以て人を視ること勿れ。不嗜殺人の心を以て人道

扶植の主義を持し、同種同族患難相救ひ、疾病相養ふの政策を行へ」と訴える。

ところでこの終章の呼びかけは、第四章の「日本と支那分割の究竟的利害」の、中国から手を引いて、事態を静観して一切関与しないとの宣言と、一見、矛盾するよう見える。しかし当人は、前者は日本への熱い願いであり、後者はその願いがないものねだりでしかない、現状を冷静に見つめた現実的判断だと答えるだろう。だから矛盾ではないことになる。

しかし右の引用文に続く、「人を生すの道を以て人を殺せば、死すと雖怨みず。人を佚するの道を以て人を勞すれば勞すと雖叛かず。殺人剣即活人剣、恩威兼ね行ひ、寛猛相済し」などの文章の、うわづつた、独りよがりの奥底に、何やら危うい気配を感じざるをえない。そして日本人の反省と努力により「王道」の域に達したならば、「豈但に日本民族の發展とのみ云はんや。黄種統一も得て期すべく、世界平和も得て望むべく、四海兄弟、天下一家の最上乘理想も、得て実現すべきなり」と続く文中に、過剰なる善意と恐ろしいまでの他者感覚の欠如とが認められそうである。中島端の場合は、これがありえない夢想であることは十分承知の上の、単なるレトリックに過ぎなかつたことは言うまでもない。とはいえたアジア主義者の大東亜共栄圏、八紘一宇の大きい夢は、こうした自己陶酔的な理想に胚胎するように思われる。

だが『支那分割の運命』印刷中に、明治天皇はこの世を去つた。ということは、日本の亡国の兆候を挽回し、中島端の理想を託する頼みの綱の、カリスマが不在となつたことになる。だとすると中島端の希望も理想も、あえなく潰え去つたことになる。彼の意氣込みが、見事にうつちやりを食らつたその時点で、この書は読者と相見

えることとなつた。

さて第五章「日本帝国百年後の運命」から最終章の第十二章「日本帝國の覺悟」に対する『駁議』の中心は、日本の天皇制国家が、もはや二十世紀の「平民政治発展の時期」にふさわしくないという指摘である。中国だけでなく、ポルトガルも王政を倒して共和政を樹立し、ロシアにも革命の胎動が始まっている。「君主の魔物は、數十年ならずして、まさに世界に跡を絶たんと」している。中島端が先覚者を以て自任するのであれば、「必らず国利民福の問題、平等を曰い、自由を曰い、君主の打倒を曰う」にちがいない。だがその逆だとすると、中島端は、「實に世運を害するの蟲賊にして、進化を阻む人妖鬼畜なり」と決めつけられる。

日本の教育は、「獨夫の奴隸」養成の教育である。日本の陸海軍は、薩摩と長州の藩閥の情実人事により勢力拡張争い中であり、まさしく「地域的觀念」の強さを物語るものに他ならない。日本の憲政における議員の買収、投票権者の買収の横行は、これこそ心の「不潔」ではないか。日本は世襲身分制により、「その権利の不平等」が元通りであり、立憲とは名のみの「偽立憲」である。ために「幸徳氏慨然として社会主義を提唱し、以てその不平を正さんと欲」したのである。従つてそれは、中島端の「元勲大臣や薩長二州の人の専横無忌を痛斥する言と相合す」るものである。この幸徳秋水を死刑に処する、日本政府の非人道性は、全世界の非難を浴びている。中島端が幸徳を鬼畜と罵り、大逆と誹謗するのは、一体どんなんつもりか。この「駁議」の逆襲は、なかなかに効果的だと言えよう。

ところで以上の『駁議』の中で最も注目に値するのは、第七章「日本の産業」に一つの眉批もなければ、『駁議』もついていない

ことである。ここには日本の産業が、まだ第一次産業の幼稚な段階にあることが述べられていた。下篇第三章で日本の国力を論じた際に、日露戦争のために国内・国外で借りた国債は二〇億円のぼり、毎年の租税が七億円も課せられ、国民負担は年々増え続け、「全国破産の禍」⁽⁹⁾が出現しようとしていることが述べられていた。⁽⁹⁾その箇所では、日本が貧困に苦しんでいるとの眉批があつた。農業国にとどまっていることと、対外進出の戦費をこれ以上出せない財力不足との関係とが、あまりよく呑み込めなかつたのかもしれない。

「日本の外交」の章で、辰丸事件への粗暴な対応に、広東で日貨ボイコットが起るや、林権助公使が召還されたことを述べた箇所の『駁議』は、中国人がとつぐにこれを忘れ去り、日貨購買熱が以前より数倍に増えていることを慨嘆していた。こうしたこととつき合わせて考えてみると、政治・外交の背後にある経済のもつ重み、また農業国の生産性の低さなどへの認識不足を見てとることができる。ともあれ、第五章から終章までの『駁議』は、天皇制を中心とした、日本社会の旧い体質の根強さ、日本の近代化が上辺を飾つたものにすぎないことなどへの理解を深めることができたと言えよう。

そしてそれは反面、辛亥革命を成功させ、二十世紀の平民主義の思潮と歩調を同じくしている中国に対する誇りと自信をもたらすものであつただろう。とはいへ、彼等とて、中島端の指摘する、中国の政治の前途の不安定さ、列強の侵略の企図について、眼前をよぎる暗雲に無関心であつたわけではなかつた。これについては、今まで再三述べてきた。

中島端の指摘が、真相を衝き、自らも同様の危惧を抱いているだけに、それを日本人からだけは言われたくないとの、反撥の心理が強くはたらくこともあつたろう。『駁議』は「日本の外交」の章で、

各國がその國權を保持しつゝ、他國と外交關係を結んで平和共存を図るのが、「これ世界主義の貴きゆえん」と述べていた。だが二十世紀の初頭は、帝国主義の時代であった。何よりもナショナル・インタレストのために、各國がしのぎを削り、時として武力行使も辞さない時代であった。

そして日本と中国の場合、そのナショナリズムが、複雑に屈折して、無用な誤解や紛糾を招き易い関係にあつた。中島端が、「彼我の相疑ひ相忌むは、必しも尽く事實ならずと雖、又必しも尽く事實なきにあらず」と率直に指摘しているように⁽¹⁰⁾、一方のみの責任でもなかつた。お互いに感情を刺激する言葉を投げつけ合い、ナショナリズムを競り合う、両者の不幸な関係に終止符を打つには、いかなることが必要なのか。

さて次章では、『支那分割の運命』執筆以前の中島端について、その生い立ち、中国行きの経過と、中国滞在中の生活などを見ることにしたい。中島端の中国との関わりが、その陰影に富む独自の中國觀の形成にいかなる影響を与えたかを見てみたいと思う。

三 『支那分割の運命』以前の中島端

1. 中島端の中国滞在と帰国

中島端は、安政六年（一八五九）一月、江戸神田お玉ヶ池で漢学塾を開いていた、中島撫山の次男として生まれた。家督を継いだ長男のみが先妻の子であり、端は後妻の二番目の子で、その初めての男子である。同母の兄弟は、男子五名、女子四名で、端の四番目の弟で六男の田人^{たびと}の子が、中島敦である。昭和五年（一九三〇）に端が死した後、敦が東京帝大文学部在学中に「一つの私記」として書

いたのが、『斗南先生』である。中島端は「まさし」、端藏とも名告り、字は儀之、号は斗南(1)であり、別号・筆名には、復堂、勿堂、勿、忽堂野人などがある。

中島端は、「数へ年の六歳より白文の論語素読を課せられ」、「三四の頃より漢文」の作文、漢詩の作成に励むといった、旧式の教育法で育てられた。ただ幼い頃から病弱で、大病で臥床することも多く、父の勧めで擊劍術を習って、健康を回復したという。とはいえた薬は、生涯手放せなかつたといふ。従つて学業も中途半端で終り、また兵役にも徵されず、不孝・不忠を恥じ、自らを「廢人」に分類していた。⁽²⁾人一倍自尊心が強い性格であつたため、挫折感も強かつたようである。

明治維新後、父は江戸を引き払い、埼玉県の久喜で漢学塾を開いた。中島端は、長兄の栃木県の塾を手伝い、明治十五年、父の許に帰り、父の塾を助けることになった。明治二十一年には、「肌香夢史」⁽³⁾の筆名で、『野路之村雨』なる政治小説を発表したといふ。これは明治二十年の井上馨の条約改正案に反対して全国から集まつた志士を追放する、保安条例下の青年を主人公したものといふ。

またその頃、土地の有志の人々と「无邪志会」を結び、倫理教化、世風批判のための学術演説会を、二か月に一回開催したといふ。中島端の國士的憂国の念は抑えがたく、明治二十四年七月、「國南狂生中島端識」の自序の下、『近世外交史』（上下篇 全二一八頁）を、前述の小説と同じく自費出版した。これは、井上と大隈の明治二十一年、二二年の条約改正交渉に至る外交史を振り返り、彼等二人の「奇怪政略」を排して、眞に独立国家としての要件を具えるよう呼びかける。特に日本の外交が無定見で不見識であることを詰る、悲憤慷慨調の漢文読み下し体の文章は、『支那分割の運命』のそれと

全く同じである。

だがこの場合も、史実を列举し饒舌である。問題点を剔抉する鋭さには驚嘆させられるものの、具体的な実効性のある方策を提起だけである。当人が必死にヨーロッパ近代史を学び、新書を耽読した形跡はよくうかがえる。だが正規の学問の機会を逸した、独学型の人間通有の偏頗さ、独善癖を濃厚に帶びていたことは否定できない。それは、「僻邑書籍に乏し」⁽⁴⁾く、「学問淺薄識見固陋」の「田舎書生」の、「自ら已むことを得さ」る憂国の至情をぶつけた、慨世の書、警世の書であった。前の小説ともあわせて特に反響はなかつたらしい。だがこれを契機に、国粹主義、國権主義を唱える政教社のリーダーたちに、名を知られることになったものと思われる。

明治二六年、中島端は、父の以前の門下生で、地域の教育の振興に深い関心をもつ、宮内翁助と相はかり、新しい「専門学校」の設置を申請して認可を得た。それは「明倫館」と言い、将来は中学校に発展して、地域の指導者の養成を期待されていた。よつてそのカリキュラムは、皇漢学の殻を打ち破り、英語、算数、歐州史学、歐州文学を探り入れていた。⁽⁵⁾彼としては、創業の責任者として、四、五年間は新事業に対する諸方面の「呶呶」に当り、「守成」はすぐ下の弟中島竦に委ねるつもりであった。彼は、「涙多ク血多ク喜怒多ク言辞多ク失行多キ」自分が、「決シテ教育ノ任ニ通スル者ニアラズ」と認めていた。⁽⁶⁾

従つて中島端は、「國家の前途」に微力を尽すという年来の宿願のため、別の道を考えていた。そしてそのチャンスが訪れ、彼が埼玉県久喜の地から旅立つたのは、明治三五年（一九〇二）の春のことであった。彼はすでに満四三歳になつていた。東亜同文会会長近

衛篤麿の要請により、杉浦重剛が東京同文書院及び上海の東亞同文書院院長就任を受諾し、中国に出発することになった。かねてより杉浦の知遇を得ていた中島端は、同行を許されたのである。⁽¹⁸⁾

四月九日、新橋から大阪に到着した杉浦の一行を訪れた中島端は、その一行に合流した。四月十四日長崎を出帆、十六日、上海に到着し、杉浦に隨行して経元善を訪問、二一日、一行とともに長江を溯り、南京、安慶に立ち寄り、二五日、漢江に到着した。杉浦は、張之洞を表敬訪問したり、大冶鉱山に行き、日本の製鐵所が購買した獅子山を見たり、「交ヲ清國ノ人士ニ結ビ、親シク清國ノ實況ヲ目睹」する訪中目的を果していった。

上海到着時にすでに不潔、臭氣のすさまじさに辟易していた中島端は、「江南第一の新政家張之洞が風采」を見たいと考えていた。⁽¹⁹⁾だが杉浦から、その会見の際に手漬をかんだとき、それは中国人の「例癖」であることは重々承知しつつも、「けだし張は新政に方りて、手漬一流の文法を用ゐしなり。其の効果の有りや無しや、問はずして知るべきなり」と結論した。勿論その前に、張之洞が苦心して建設した漢口、武昌の、「一味の糊塗敷衍!!!一味の腐敗汚穢!!!」に驚き落胆していたこともある。そのため、会いたいと願つていった劉坤一に会う意欲も失なってしまった。劉坤一はもはや七十年代の半ば、少年時代からのアヘン吸飲が中毒となり、見るにたえない姿だときかされたためもあった。

四月三〇日漢口を出発し、五月二日上海に着き、ここで杉浦と別れ、日本旅館の豊陽館に移つた。上海の東亞同文書院で教鞭を執るようとの依頼は断わった。⁽²⁰⁾さて江南の改革派政治家に失望した中島端は、民間政論家の主張を聴くべく、上海の諸新聞社の主筆のもとに会いに出かけた。⁽²¹⁾一切の紹介状も何もなしの「單刀直入法」の個

人訪問であった。ところで彼は、これから一九一一年春の末まで満九年有余の中国滯在中、羽織・袴の和服にステッキという姿であった。そしてそれは、昭和五年の最後の中国旅行においても然りであった。そのなりで出かけ、「日本男子 中島端」と書かれた名刺を渡すのである。

さてこうした突然の訪問で、「中外日報」の主筆汪康年、「蘇報」の經營者陳範と知り合つた。筆談で意志を疎通させるというやり方で、陳範との筆談は「蘇報」に載せられたとのことである。更に陳範を通じて呉保初を知り、また呉を通じて、「一種突飛的急進説」を唱える、章炳麟とも会つたといふ。また一九〇二年夏のいわゆる呉孫事件により、日本政府から追放され帰国した呉稚暉らを迎えての、張園の大会にも誘われ、演壇にあがつて字を書いたといふ。中島端は民間の政論家とのつき合いの中で、急進・漸進を問わず彼等には、「一定の見地」も「的確の根柢」もなく、外から来る騒ぎに他動的に動かされ、自主性・主体性がないと結論した。また、彼等の皇帝に対する忠誠心のなさにも、驚かされている。皇漢学者の家に生まれ、國家統一の中核として皇室を考えてきた中島端とり、皇帝尊崇の念がないことは、正しく国家組織の分解しつつある姿を物語る以外になかった。こうして間接的には新聞雑誌から、直接的には知識人との交流を通じて、「官民間の情偽」を知る中で、政客政党の頼むに足らないことを悟つたと言う。

ところで別段「哺啜のために」中国に来たわけではない中島端も、滞在が長くなると、「糊口の資」を求めざるを得なくなつた。彼は、汪康年との関係で知り合つた羅振玉に、日本文の漢訳を代償に、その家の食客となることを申し出て、諒承を得た。⁽²²⁾また漢訳の仕事を通じて、南洋公学監院・京師大學堂編訳分局の主幹張元濟を知ること

とになった。一方で日本文の漢訳に従事しつつ、他方で中国の友人達と交わり、漢字新聞を丹念に読み情報を蒐めていた中島端は、一九〇四年の十月、上海から蘇州に移ることになった。

これは、端方が一九〇四年五月、江蘇巡撫兼署理兩江總督に転任して来たことにより、羅振玉が江蘇學務所主幹に抜擢され、師範学堂監督を兼務したからである。中島端は、羅振玉の要請に応じて、江蘇尋常高等師範学堂で教育に当ることになった。総教習は、一八九七年以來、羅振玉とともに、「農學報」の刊行、東文学社、南洋公學東文科などで協力してきた藤田豊八（劍峰）である。日本人教習の一人には、田岡嶺雲もいた。だが他の人々が「風流自ら喜む」のに対して、肌が合わず、一九〇六年春、羅振玉が參事厅行走、並びに京師大學堂農科監督に転任したのをしおに、江蘇師範学堂を辞することになった。⁽²⁶⁾

この間、「満人中の白眉」で、当時の三大壯年政治家として名声の高い、端方の人と為り、その施策の実態を、つぶさに観察する機会を得た。その結果、「外面は新文明の経世家にして、中心は旧時代の專制家にあらずや」と疑うに至った。端方が官界の陋習（門包）や「三大節」の進献など⁽²⁷⁾を廃止したのに感嘆したものの、彼の官邸の裏口に届けられる書画の類はますます多く、賄賂がやまないことも見た。また端方が憲政考察大臣として派遣されて持つて帰った報告書は、「大抵坊間印書の抄訳に過ぎず」とも指摘する。こうして中島端は、清朝の前途をますます危ぶむことになった。⁽²⁸⁾

その後、上海で一年ほど閑居し、生活の資に窮したため、かつての張元濟との縁もあって、商務印書館の編訳所に入り、漢訳の仕事を従事することになった。当時の商務印書館は、日本東京の金港堂との合弁会社であり、その間の指導権をめぐる軋轢は陰に陽に激し

かった。中島端は、同僚の日本人とも親しく交わることなく、「また連りに凶厄に遭うも、噤んで敢て動かず」、目立たず日々をやり過ごしたようである。⁽²⁹⁾ その間の漢訳の成果は、「上海商務印書館」の名で刊行された「説部叢書」の、編訳所訳として訳者名が記されていない諸作品の中に埋没していると見られる。

そしてこうした翻訳機械のような生活を足かけ三年ほど続ける中で、中国の首都北京の様子を観察したいとの願いが強くなつた。弟竦の「斗南存藁序」によると、「南人巧慧と雖も氣魄なくして、ともに振作を談ずるに足らず。北人粗豪、尚お或は用う可し」との理由らしい。そしてその希望が実現し、北京に着いたのは、一九〇八年十月末のことであった。「元明以来の皇城所在の地」北京は、「雄麗」で「繁昌」しているだろうと、「古詩人の帝京篇など心に誦しつつ」訪れた中島端は、その砂塵の凄まじさに圧倒され、「活気なく、生色なし」の人家の「不潔卑陋」に驚かされた。⁽³⁰⁾

その年の十一月の半ばには、光緒帝、西太后的死去が相つぎ、二人の死に対する一般国民の反応、袁世凱の放逐などの、目まぐるしい権力中枢部の交代劇を見ることができ、これを機に袁世凱の人と為りも詳しく知ることができた。翌年五月の光緒帝の大葬の儀式には参加できなかつたが、官僚も民衆も、「哀悼の情」も「敬虔の意」もなく、「無秩序無規律」の見物氣分であつたときいた。これを慨嘆した皇室中心主義者中島端は、羅振玉に一書を寄せ、彼の力を借りて官界の猛醒を促そうとしたが、果して何の効果もなかつた。⁽³¹⁾

同年十一月半ばには、西太后の大葬の儀式が執り行われ、西太后には「徹頭徹尾不服の一人」である中島端も、死者への礼儀として、某氏と路傍に脱帽して直立していた。そこに当口の大礼の總指揮者である某親王が、小走りに駆け寄つて来て某氏と言葉を交わし握手

して立ち去るのを体験した。これはもはや、場所柄も身分柄もわきまえぬ、「痴呆けし挙動」に他ならず、清朝瓦解の日の間近さを痛感させる出来事であった。この日、カメラで大葬のありさまを撮影したなどの廉により、直隸総督端方は、李鴻章の孫李国杰から弾劾され、十一月二三日の上諭で免職されている。⁽³⁾

もはや清朝の衰亡を確信できた中島端は、そのまま北京にとどまり、清朝政府の断末魔のあがきとも見える愚かしい行動の数々、地方の知識人たちの国会速開・即開請願運動、安奉鉄道改良問題をめぐる日本外交の拙劣さとそれに対する日貨ボイコット、ロシアの侵略の策動と満人皇族の対応、民衆のハレー彗星接近への迷信と不安な心理などをつぶさに実見実聞して、一九一一年の春の末、日本に帰国することになった。⁽²⁾

この間、摂政王とその二人の弟の喜劇的悲劇のさまを、フランスのルイ十六世とその二人の弟の所行に擬して、ミーネのフランス革命史の漢訳を試み、半年を費している。彼としては、この三人の「頭脳に熱湯三斗を浴せ掛けて最後の気付を試みばや」と、思い立ったからだという。ただ、清朝皇室に障りがあるとのことで、出版は引き受けてくれるところがなかつたという。

帰国して、杉浦重剛に挨拶に行つたところ、居合わせた客から、五月三十日、漢文学会で話をするよう頼まれた。中島端は、「支那の未来と漢文学者の覚悟」の演題で、中国の全階層に、亡國の症候が現われていることを指摘し、革命の気運が迫っているが、結局は五胡十六国の再現、分割の運命に陥るであろうとの見通しを述べたという。とりわけ一九一一年春、江蘇省崑山で起きた、流民七百余人の虐殺事件を取り上げて、「人命の尊重も、人権の保護」もない官憲の対応を批判した。と同時に、こうした私刑を許す風俗習慣で

は、一、二年後の憲政施行の国民の資格はないと断言する。

この日は、体調の関係もあり、また漢文学者ではないとの自覚もあって、「漢文学者の覚悟」は端折つたという。聴衆からは「冷然苦笑」されたといえ、当人はその頃から筆を執つて世に問う考えが芽生えたようである。だが六月下旬、父が八三歳で死去し、長兄が先立つていたがゆえに、中島端が父の葬儀など、一切の采配を揮わざるをえなかつた。そうこうする内に、十月には辛亥革命が起り、出先の外交官、駐在武官から、新聞記者、政論家などの狼狽、混乱を見て、稿を起すことにした。当初は『支那の将来と日本』と題していたが、ある人の意見を容れて『支那分割の運命』に改めたといふ。筆の早い彼のこととて、ほぼ一ヶ月半で年内には完成したといふ。「元來亞州の事ハ亞人の領分に候 支那の事ナド邦人真先に判断し指縦すべき筈」であるのに、「いつにも歐米人の後塵を任せん事ふがひなき至に候」との手紙にあるように、自らの見通しの正しさを世に問うための執筆であり、翌年によく出版の運びとなつた。

さて以上、『支那分割の運命』執筆に至る、中島端の人生の歩みを見てきた。ところで、一九〇八年十月末に北上して以来、彼の北京での生活の状況はどうであつたか。それを知るためには、彼の弟たちの消息を知つておかねばならない。彼が中国事情に精通しているのは、彼の「真摯ニ研究スルノ精神」によるといえ、弟たちからの情報も大いに役立つたことは疑い得ないからである。よつて次には、弟たちの動静を取り上げたい。

2. 中島端の弟たち

中島端の弟達の中で、端とほぼ同じ頃、中国に渡つたのは、末弟

の比多吉（一八七六～一九四八）である。比多吉は、東京外国语学校支那科を卒業して早稲田大学の講師をしていたが、一九〇二年、保定の警務学堂の教師に招かれた。保定の警務学堂は、義和團事件以後、中国に近代的警察制度を樹立するため、直隸總督袁世凱が日本人川島浪速を招聘し、基礎づくりを依頼したものである。⁽³⁴⁾ 比多吉は、山根立庵から「支那語に巧みにして学問を有する者」と評されている。⁽³⁵⁾

比多吉、端に続いて中国に入ったのは、端のすぐ下の弟、三男の中島竦（一八六一～一九四〇）である。⁽³⁶⁾ 中島家の同胞の内、病弱なのは長男の靖と次男の端の二人だけで、他の八名は健康上に問題はない、元来が長寿の家系であった。中島竦は一九〇二年十一月四日に東京を出発し、一九〇三年三月、川島浪速が監督（校長のこと）⁽³⁷⁾（後藤注）をしていた、京師警務学堂で文書の翻訳の仕事に就いている。⁽³⁸⁾

一九〇三年十一月頃、もう一人の弟、五男開蔵（一八六八～一九五八）が中国に渡っている。開蔵は父の親友山本家の養子に入つたため、姓は山本を名告っている。彼は帝國大学工科大学卒業後、海軍省に入り、海軍造船部門で活躍し、日露戦争の際、海軍艦政本部の部員になっている。中島竦の明治三六年十一月一日付中島田人宛の書簡では、兄の端より久方ぶりの消息に接して安心したと述べ、更に続けて、「昨日新來ノ新聞ヲ見候ニ山本モ今度上海え官用ヲ帶ヒテ差遣セラレ候由 何等ノ公用ニヤ 或ハ揚子江ニ浮ブヘキ浅吃水ノ砲艦新造ノ為メ右等取調トシテ被遣候者歟……何レ長キ事ニハ有之間敷ガ兄弟四人一時南北各二人ツ、分レバニ此国ニ入ルナドヨク／＼此国ニハ因縁深キ事ト存候」と記している。

山本開蔵が今回の上海への公務出張に当たり、上海にいた兄の端に

会ったか否かは不明である。ただ端が臨終の床についたのは、中島敦の『斗南先生』によると、この「洗足の伯父」開蔵の自宅である。よってこの時に会ったか否かは別として、兄弟間の文通の中で、漏らされる情報もあつたにちがいない。そしてそれが、「日本の陸海軍」の章の執筆などに活かされたと見てよからう。

ところで中島竦の性格は、「小心翼々散テ異ヲ求メズ肯テ新ヲ立てズ、倒レテ復タ起キ屈セズ沮マズ恥ル所ヲ知ラザル」と、兄の端から評されるように、地味で辛抱強い人柄であつたらしい。⁽³⁹⁾ 兄の端が、他人から風の便りで消息をきくことさえあつたように、気まぐれにしか手紙を寄越さないのに対し、竦は実に筆まめであり、兄弟間の情報伝達の中継基地のような役割を果している。

特に日露戦争に際して、比多吉がロシアの鉄道爆破などの敵後方攬乱の「特別任務班」に志願したことを喜び、決死隊壮行の宴では、渡中以後、初めての漢詩を「喰リ出シ申候」とまで興奮している。⁽⁴⁰⁾ 比多吉の活躍については逐一報告し、他の兄弟にも知らせるよう告げている。九月には、比多吉の活動が順調に成功し、満州軍総司令部附通訳に任せられたことを告げるとともに、「又シテモ又シテモ氣味ノヨキ事カナ」と、遼陽占領にひき続く沙河会戦の戦果に、躍り上っている。⁽⁴¹⁾

中島竦は物静かで、学究肌の人物と伝えられている。だがその心の奥底には、幼時より叩き込まれた「家学」の皇漢学の血が熱くたぎつていたらしく、比多吉からの受け売りか、奉天の軍略上の地位を説き明かし、攻略の利害を論じたりもしている。⁽⁴²⁾ 身内の間柄のゆえ、本来の生地がさらけ出されたのかもしれないが、その上擦つた好戦的な口吻の内面と、穏和な外向との落差の大きさには、些か驚きを禁じ得ない。

竦には北京滞在中に、『蒙古通志』の著述がある。その序文を書いたのは、北京公使館附武官青木宣純であり、青木の依頼により完成したものと記してある。⁽⁴⁵⁾ だとすると、日本陸軍の蒙古経略のための準備の一環であることを、中島竦は十分承知の上で仕事を引き受けたことになる。従つて竦の碑銘の文中に、「人と為り寧静寡欲、名利に近づかず」と記しつつ、他方、「世事に通じ、人情を解して、儒者迂僻の習なし」とあるのは、なかなかに意味深長な形容とも言えよう。⁽⁴⁶⁾ 外見は「木食道人」の脱俗の風であつたが、その中身は、世俗と要領よく調子を合わせて疑うことを知らない、俗物性、偽善性を潜ませているとも言えそうである。

ともかく一九〇八年十一月末から、中島端はこの弟竦の許に身を寄せることになった。比多吉は日露戦争終結後、直隸法政学堂や保定軍官学堂に通訳として勤務しており、当然、北京に会いに来ることもあつたろう。従つて比多吉からの情報、及び竦の上司川島浪速など、竦の人脈から得られる情報なども入るようになり、中島端はそれらを自分が蒐めた情報と綜合し、相互につき合わせて分析して、より正確な判断と見通しをつける条件を得たと見てよい。

さて一九一一年春の末に端が帰国し、六月には老父の死去などの多忙の時にも、竦からの最新の情報は次々に届き、『支那分割の運命』の執筆にも役立つことがあつたろう。端は明治四四年十一月二六日付閑若之助宛の便りの中で、「北京の情況ハ三郎弟より毎次通信あり 同人ハ今後大変の猝に起るが如きことハなかるべきやう申居候へ共端ハ然らず あまり遠からぬ中に何等かの激変あらんト預想いたし居候 端の所見をして中らざらしめば實に幸なり」と述べている。勿論、竦および竦の人脈につながる人々の、十一月十六日の袁世凱内閣の成立を以て清朝の延命成れりの主観的願望を交じえ

た予想は、見事に外れることになつた。中島端は自己の見通しに自信を表明しつつ、情勢の激変の中で混乱に巻き込まれる「支那人民ハかわいさうに候」と同情を寄せてやまない。

『支那分割の運命』を政教社から刊行した一九一二年十月には、中島端はすでに満五三歳であった。七六歳の老母と埼玉県久喜で暮すのは、独身で無職の彼しかいなかつた。更には、長男の遺児たちや、弟田人の子供を預かって養育する責任もあつた。竦は間もなく北京を引き払い、宮島大八が經營する善隣書院に住み込み、中国語、蒙古語を教えつつ、中国古文字学研究に専念した。比多吉は天津駐屯軍司令部に転じ、滿州國創設に関与して行くことになる。

さて中島端は著書出版後、どのような活動に従事したか。次章ではそれを簡単に追跡し、彼の言論の問題点を洗い出して、彼のアジア主義思想の可能性と限界性とを、見極めておきたいと思う。

四 著書出版後の中島端

『支那分割の運命』が、中国人の間に大きな反響を巻き起したことは既に述べた。また初版から一年もたたぬうちに再版されたことも、既に述べた通りである。そして中嶋端が、「支那文人の拙著『支那分割の運命』を批駁せるものと雖、余輩が列挙せる実事実拠を抹殺し得ざりき」と語る如く、それは史実に、また本人の実際の見聞に基づく、「真実的確」なものであつた。⁽⁴⁷⁾ それが評価されたのか、雑誌「日本及日本人」への寄稿を求められるようになつた。本名での寄稿三四篇、勿の筆名によるもの二篇、忽堂野人の名で七篇、勿堂の名で二六篇、つごう七〇篇近くである。

本名での寄稿は、乃木將軍に関わるもの、また六八九号（大正五

年九月二〇日）の臨時増刊号に、「日本文章の墮落に候」の掲載などを除いて、基本的には中国を対象とした文章である。他の筆名での寄稿は、主として二本の外交政策、なかんづく対中国外交を対象にしているが、また内政・政界批判に及ぶこともある。勿、勿堂野人の名を使うのは、大正二年に限られる。本名での文章が大正六年でほぼ終了するのに対し、勿堂の名の寄稿は、大正三年から同一年まで及んでいる。大正十二年の政教社分裂以後の「日本及日本人」には、本名で一篇、勿堂で二篇のみである。

一人で数個の名の使用は、テーマによる使い分けと、同一名の頻出を避けたためかと思われる。他の雑誌からは、特に寄稿の依頼もなかったのか、文章の発表はない。だが、「日本及日本人」掲載文だけでも、結構な分量である。よって本稿では、本名で発表の中国関係の文章にしぼって考察することにしたい。それは、「支那の将来」十四篇、「余輩の支那觀」九篇、「支那研究の注意」四篇である。それらの内容は、三つに大別できる。第一は、中国行きの動機、滯在中の生活、交友、遭遇などを述べたものである。第二は、民国の政治情勢に対する分析と評論である。第三は、中島端の政論に対する批判への反論である。さて先ず第一から見ておこう。彼は、「愛親覺羅氏の中原に入りてより、殆ど三百年。胡運は已に尽きたり。但支那民族の将来は如何」との考え方から、中国に渡ったと言⁽⁴⁸⁾う。彼は清朝滅亡の確信を自らの眼で見定め、清朝倒壊の際、漢民族の運命がどうなるか、それを尋ねたかったのである。そして彼がまず出会ったのは不潔であり、清朝滅亡の確信はいよいよ強まつた。

だが、不潔の一事を以て清朝の命運をト定する彼に、「周秦以来、蓋是の如し。孔孟の聖賢と雖、亦不潔堆裏の老先生のみ」と説く者もいた。彼は、「断じて此等の説を首肯せず」と、はねつけた。不

潔の開始時期は、確定する資料はない、だが、不潔の増加には、清朝の責任が大きい、と主張する。彼にとり、不潔こそ、中国の風俗習慣や国民性の腐敗・墮落を示す、極めて重要な徵表に他ならなかつた。そして彼は、それを全国、全階層の中に見出したのである。彼の中国滞在中の生活、交友などについては、第三章で既に述べた。従つて第二の内容に移ろう。中島端はそれを、袁世凱政権の動向、共和政治の前途、「支那民族の将来」の「三層」に分けて、研究を進めていく。まず袁世凱について、彼は既に著書の中で、「一転瞬間、中央集権の制と為り、十年總統と為り、終身執政となり、一躍して僭偽帝王と為らん」ことを予告していた。そして事態は、彼の思い描いた筋書き通りに、一齣一齣、着実に進んで行つたのである。彼は、袁世凱の人物・技倅・政策を総合し、「論理的確なりや否や、事実の偽を顛倒せざるや否や」とに考慮を払いつつ、洞察していく結果だと言う。その直感力の鋭さは、彼がいつも嘲笑するモリソンなど、とても足許にも及びえないとしてよい。

そして第三革命により、袁世凱は帝政の夢が破れて頓死した。中島端は、次に二層めの共和政治の前途の研究に進み、當時、中国国内外で呼び声の高い、共和復活の樂觀論の根拠の無さを指摘する。彼はまたもや安易な南北妥協で、共和の再出発が簡単に成功することは信じなかつたのである。⁽⁴⁹⁾だが彼は、共和の反対者ではない、彼は、共和以外に、「民国将来復活の途」はないと確信し、共和に共感して、「革命覚に同情するを惜ま」なかつた。だが彼は、共和の前途を悲観するのである。

その理由は何か。彼は次のように述べる。

要するに支那民国の新政治の原動力は、其の分量の甚だ鮮少なりしのみならず、其の性質も亦極めて微弱なるを免れざりき。

他なし、支那国族中、本来共和の種子なかりしに由るのみ。否種子ありと雖、播種の田地未だ広からず、萌芽の時機未だ熟せざるに由るのみ。

彼によれば、辛亥革命は、「愛親覺羅氏の自滅的革命」に他ならなかつた。それは、「社会の最下層より醸釀し萌芽」した、「終始徹底的なり、真剣的なり。其運動作用、極めて明白にして、又極めて痛快なり」の「特色」をもつていなかつた。そこに中島端の、中国の共和の前途に対する悲観的理由があつた。

だとすると、何から着手すべきか。「要は民心如何に在るのみ」

とすれば、宗教からか、教育からか。自由・平等の「共和の理想」を徹底しようとすれば、それと相容れることのできない「儒教の根本排斥を圖らざるべから」ずである。それは、四億の「蚩々たる愚民」の啓蒙と並んで、いざれも容易な業ではない。⁽⁵⁷⁾ ましてや、国内の混乱につけ込んで、列強が分割の機を窺つてゐるときだからである。従つて時間が足りず、失敗は必然のこととなる。

そして対独参戦をめぐる政権内部の対立を機に、清朝復辟のクーデタが起つた。よつて共和復活の期待は潰え去り、南北両政府が対峙することになった。中島端の予言した、五胡十六国の再現、軍閥割拠・混戦の時代に入つたのである。

中島端は三層め、即ち「支那民族の将来」の考察に進む。彼は、中国民族の出路は富強であり、そのために、国民皆兵の徵兵制度と地租改正（増率）とを、即刻実行せよと提案する。もちろん、彼はそれができない相談だといふことは知り抜いてゐる。どだい人口も、土地の面積も、中国の統計数字はいっさい當てにならないからである。だとすると、中国民族の将来は、悲觀しかない。そして悲觀しつつも、「一面支那民族の大悟徹底の最後の一日を」、祈るような気

持ちで待つ以外にはない。⁽⁵⁸⁾

幼少の頃より中国文化に触れてきた彼は、中国民族が決して劣等民族ではないことをよく知つていた。⁽⁵⁹⁾ 彼は、「其聰明、其道徳、其力量、其感情、確かに宇内最大民族の素質を具有せる者」と言う。そして、「彼らが近世紀以来、萎靡腐爛の醜状を呈せるは、一種麻醉の毒に中りて嗜眠症候に陥れる結果のみ」と口惜しがる。その口惜しさが、露骨に過激に迸り出ると、惡罵毒舌となり、叱咤激励となる。それが相手方の反感を招くのは、当人も重々承知の上であつた。⁽⁶⁰⁾

さて、第三の、中島端の政論を批判する者への反論に移ろう。まず単純な批判は、彼の文章は同じ論点の繰り返しが多いというものである。彼はそれに対し、母の重病の時の医師の指示をまねたとし、執拗に繰り返せば、幾分かは吸収されて残るからだと応酬する。確かに説法の一つのタイプとしては成り立とう。だが一方では、マイナス面を伴うことに、あまり反省はないようである。もつと整理された文章であつたら、もっと多くの人々に深い影響を与えることができだらうとは、考えないようである。そして当人は、深夜、記憶に任せて一氣呵成に書くやり方に居直つてゐる。

中島端の政論に対する批判の中で、最も急所を衝く批判は、「足下は支那を如何に処分せんと欲するか」であった。⁽⁶¹⁾ つまり分割の危機を云々するのなら、それに対処する行動方針は何か、が問われたのである。中島端は以前、「支那はどうなるか」ではなく、「支那をどうするか」と云ふが日本の問題なり」と言つたことがある。それは日本の政論家が、まじめに中国の事情を研究しないのに憤慨しての一時の感情的発言だと言う。他人事めいた、傍観者の態度が気に障つたからだと言うのである。

しかし、「本来の条理より之を言へば、日本は自ら日本支那は自ら支那、両々互いに干渉せざるを以て正当とす」である。中島端はその著書の下篇第一章「東亞のモンロー主義」の中で、「支那廿一省の事は、支那人独り之を処分すべし。他国人の撃討を容さず」と、既に述べていた。従つて、相手を他者として認め、相手の独立を尊重する立場が、彼の冷静な時の考え方であったと見てよい。ところが、日本の論者の、無責任な態度に接すると、かつて熱くなつて、先ほどのような腹立ち紛れの発言がとび出すのである。

だが今度は冷静になりすぎると、「我よりも断じて助力もせず、干涉もせず、彼よりも断じて我が厘毫の扶助誘掖を受けざるを以て前提条件とせざるべからず」と、愛想尽かしの絶縁状となる。このブレの大きさは、彼の「可愛き余りて憎きが百倍」の、中国との向き合い方の複雑で屈折した姿を、如実に示すものと言えよう。^(脚) 中島端の場合、中国とゆかりの深い家に生まれたがゆえに、中国に身内の一体感情をもち、他者感覚を見失うことになり易い。そしてそれを反省すると、今度は逆に距離をとりすぎ、よそよそしい態度になる。

だが熱情的ナショナリストである彼が、独善的な親切心から、中國大陸への要らざるお節介に走らず、理性的反省の抑制がきき、「支那通」や「支那浪人」たちと同調しなかつたゆえんは、ここにあつたろう。そしてここに、中島端のアジア主義の特徴があると言えよう。本来ならば、日本と中国とは対等の独立国家として、從来からの深い絆を確認し合いつつ、近代に入つての新たな友好関係を築ける筈であった。

だが、資本主義の世界支配の進行の下、アジアはその波にもまれ、列強の侵略にさらされていた。そして、西洋人の人種的ヒエラルキ

ーの眼差しの下、日本も例外ではありえなかつた。中島端の著書『近世外交史』は、幕末以来の不平等条約の歴史を振り返り、条約改正交渉における当局者の弱腰を詰つて、憤慨するものであつた。日露戦争に勝利した日本が、今度は同じく黄色人種であり、従来からの中関係を自己の優位性の証しと考えれば、中国分割の特権を主張できたであろう。だがそれは、日本の利己心の中国への拡張であり、大アジア主義に化してしまう。中島端は、それはきつぱりと拒絶し、最終的には事態を静観するとの選択を提言した。とはいえて中国を列強の分割にみすみす放置して、それを救済できない無念の想いがないわけではない。従つてそれが、日本人への叱咤激励とともに進む。

ところで日本人と中国人とは、双方に親しみが有りながら、双方が相手を軽蔑しつつ、甘え、期待する。そしてそれが通用しないと反撥し敵意が増幅する。今回の中島端の著書とそれに対する北洋法政学会の同人の「駁議」とは、そのありさまを示す好個の例と言えよう。こうした悪縁の連鎖をどのような形で断ち切れば、眞の友好、連帶の関係は生まれるのか。そもそも眞の友好、連帶の関係とは、いかなるものを指すのか。それは、中国文化の恩恵に感謝のあまり、相手の言い分に一方的に屈従することではあるまい。ましてや、革命援助に奔走し、相手の腑甲斐なさに苛立ちのあまり、自らが代行を買って出て、結果的には中国侵略に加担することでもあるまい。皇漢学者の家に生い育つた中島端の場合、末弟比多吉の例が典型的に示すように、その道が最も自然であつたにちがいない。そしてその方向に傾く気配も、皆無でなかつたことは、既に指摘しておいた。ともあれ中島端の、中国の分割の運命の必至を予言しつつ、中国から手をひくとの選択のプロセスを辿つてきた。彼の選択も、時に大

きな揺れを示し、その真意の誤解を招きかねない惧れをもつ、苦渋に満ちた選択であった。

だが、これが一人のアジア主義者としての、中島端の選択であった。そしてまだまだ、中島端の政治評論活動は続く。筆者は、今は紙幅の都合で触れられなかつたが、対支二十一か条要求交渉に対する評論は、当時の論壇で出色の水準を示すものと、感嘆させられた。また彼が、死病をおしての昭和五年の中国縦断の旅で、何を確かめたかたのかも、興味をそそられる。ドイツ語学習歴が長く、ドイツ語には相当な学力があると自負していた彼が、晩年、『資本論』を読みたいと中島敦にその入手を依頼したなどから推して、中国の一九二〇年代の情勢の展開に対し、新しい認識の枠組みを必死に探し求めていたのかとも考えられる。

注

- (1) 東亞同文会（明治三十一年十一月二日創立）の会長近衛篤麿「同人種同盟 附支那問題研究の必要」（『太陽』明治三十一年一月一日号）、酒田正敏『近代日本における対外硬運動の研究』（東京大学出版会 一九七八）参照。
- (2) 中島端は各列強の作成した軍用地図に特に関心をもつっていたことが文中に見える。また眉批で『三国志演義』を読んだことがあるらしいと皮肉られているが、中国の軍事史に非常に通じていたようである。
- (3) 北洋法政学会が『蒙古叢書第一種 蒙古及蒙古人』を訳出して発行したのは、外蒙古がロシアの助けを借りて独立を図ろうとした、この「協約」に反対のためであつたと見られる。なお孫文の日本との聯盟による日本軍の借用、および「錢幣革命」の提案に対する痛烈な批判

は、中島端「孫中山來!!!孫中山來!!!」（『日本及日本人』六〇一號 一九一三年三月一日）に詳しい。尚、この『駁議』の執筆者は、「雪地冰天両少年」（『言治』季刊三冊 一九一八年七月一日）などから見て、李大釗かと推測される。

- (4) 一八九五年にロンドン・タイムズの中国特派員に就任したモリソンは、一九一二年八月一日、袁世凱に見込まれ、中華民国總統政治顧問に厚遇を以て迎えられた（駱惠敏編『清末民初政情内幕』下 知識出版社 一九八六年 五三一・蔡廷幹來函の附件の契約書）。タイムズ社を去つたとはい、その影響力を報道界に行使し続けるとともに、中国政府にイギリスの国益を呑ませるために努力し続けている。中島端は、モリソンが中国語ができず、漢字新聞すら読めず、情報源が限られていることを指摘し、その情報分析力を一貫して嘲笑している（『日本及日本人』五九二号 大正元年十月十五日の「近視眼的支那觀」）。特に袁世凱の「人物技倅を頌賛謳歌し、以て四百州中の一大英雄と為し、四万々人の救世主と為し」たのを、厳しく非難している。後には「専間兼顧問」とすら呼んでいる（同上誌六三六号 大正三年八月十五日の「支那の将来（五）」）。尚、日露戦争とモリソンの関わりについては、ウッドハウスマ子『日露戦争を演出した男モリソン』上・下（新潮文庫 二〇〇三年）参照。原本は東洋経済新報社より一九八八年出版といふ。
- (5) 中島端は、この「断の一字」を特に好み、『近世外交史』の末尾にも、『支那分割の運命』の「自序」の終り、終章の末尾にも載せ、行動への決断を促している。しかし何を行おのか、勇ましい掛け声のみで、内容はない。それまでの事実の列举と論理のきめ細かさとが、最終段階ではない。それまでの事実の列举と論理のきめ細かさとが、最終段階で、空疎な氣勢へと一挙に飛躍するところに、一種の壯士風氣質がうかがえる。
- (6) 伊集院彦吉公使の無惨な仕事ぶりについては、忽堂野人（中島端の

（7）中国をめぐる日米の対立を逸早く指摘していた中島端は、今回新改訂の日英同盟協約が、総括的仲裁裁判条約締結国のアメリカを対象外にしていることに、不平を鳴らしたのである。だが結局、英米間総括的仲裁裁判条約は米上院で批准が拒否されて成立しなかつたため、中島端の危惧はひとまず去つたことになる。ディヴィッド・ステイード「相互の便宜による帝国主義国の結婚——一九〇二——一九二二年の日英関係」、村島滋「二〇世紀史の開幕と日英同盟——一八九五——一九二三年の日英関係」（細谷千博、イアン・ニッショ監修『日英交流史』1 政治・外交I 東京大学出版会 二〇〇〇年）。

（8）ポルトガルが国王を放逐し共和政への革命を行なつたのは、一九一〇年（宣統二年）十月のことである。宋教仁「葡國改革之大成功」（『民立報』一九一一年九月二十五日）は、ポルトガルの新政府が諸外国の正式承認をとりつけ、内政・外交面でも着々と基礎を固めつつある姿を紹介し、外国の承認を得ることの大切さをそこから教訓として導き出している。このポルトガル革命の成功が、いかに北洋法政学会の同人たちを元気づけたかは、『駁議』のこの箇所のみならず、李大釗「十八年来之回顧」（一九二三年十二月三十日、直隸法政専門学校での講演）の中での言及からもわかる。

（9）日露戦争による戦死者、不具廃疾者の多さ以外にも、その残した傷痕は大きく、一九〇七年一月の東京株式市場大暴落を機に恐慌に突入し、労働争議、小作騒動が頻発するようになつた。

（10）下篇第四章二三三頁

（11）「中島家家系図」（『中島敦全集』別巻 筑摩書房 二〇〇二年五月）、中村光夫他編『中島敦研究』V部（筑摩書房 一九七八年）、村山吉廣『評伝・中島敦 家学からの視点』（日本公論新社 二〇〇一年）参照。

尚、「日本及日本人」誌上の筆名の勿、忽堂野人は、筆者が今回確認したものである。

（12）中島端「日本文章の墮落に候」（『日本及日本人』六八九号 大正五年九月二〇日）以下、「日本及日本人」掲載の文章は、題名、巻号、発行年月日のみを記すことにする。

（13）中島端「斗南存藁跋」（『斗南存藁』文求堂 昭和七年）

（14）中島端「与西田龍太書」（『斗南存藁』所収）、同「余輩の支那觀」（六九五号 大正五年十二月十五日）

（15）村山前掲書による。

（16）村山前掲書による。

（17）中島端の明治二七年四月二日付中島若之助宛書簡（注11）の『中島敦研究』所収。以下書簡の類はすべてこれによるものとする。

（18）「塾主渡清日誌（明治三十五年六月）」（霞山会『東亞同文会史』一九八八年）

（19）中島端「支那の将来（一）」（六二七号 大正三年四月一日）

（20）中島端「与羅叔蘋書 又」（『斗南存藁』所収）

（21）「支那の将来（二）」（六二八号 大正三年四月十五日）。尚、汪康年の同人たちを元気づけたかは、『駁議』のこの箇所のみならず、李大釗「十八年来之回顧」（一九二三年十二月三十日、直隸法政専門学校での講演）の中での言及からもわかる。

（22）「支那の将来（三）」（六三三号 大正三年七月一日）

注20)に同じ。

（23）注20)に同じ。

（24）羅振玉「斗南存藁序」

（25）当時羅振玉は、「教育世界」「農學報」の雑誌を出していた。中島端の日本文からの漢訳は、今、判明しているのは以下の六種である。（1）

『坪氏実践教育学』（オーストリア）坪斯佛勒特力著、（日本）藤代禎輔訳『実践教育学（坪氏）』博文館 明治二十七年（日本）中島端漢訳。北京 大学堂訳書局。一九〇二（光緒29年）、二冊。（2）「教育小説愛美耳鈔」（フランス）約罕若克・盧騷著、（日）山口小太郎・島崎恒

- (33) 五郎訳『エミール抄』開発社 明治三十二年、(日) 中島端漢訳。「教育世界」53—57号、一九〇三年七月—八月、教育叢書第三集三・四 (3) 「費爾巴爾因派之教育」(アメリカ) シャルル・ド・ガルモー 島崎恒五郎訳『ヘルバート及び其学徒』開発社 明治三十四年訳、(日本)
- (34) 中島端漢訳。「教育世界」61—63号、一九〇三年十月—十二月、教育叢書第三集六 (4) 『新訳俄羅斯』(フランス) アントワーヌ・レーラ・ボリュ 法利著、林毅陸訳『露西亞帝国』(東京専門学校刊 一九〇一)、中島端漢訳。上海商務印書館、一九〇三。あとの二つは、「農學報」に一九〇五年に訳載した、農學博士草野正行・中村春生著の「農學氣候教科書」(『氣候教科書・農學校用』興文社 明治三十六年)、及び農學士沢村真著の「農芸科学実驗法」(興文社 明治三十三年)である。
- (35) (36) (37) (38) (39) (40) (27) (26) (25) (24) (23) (22) (21) (20) (19) (18) (17) (16) (15) (14) (13) (12) (11) (10) (9) (8) (7) (6) (5) (4) (3) (2) (1)
- (32) 注(30)に同じ。
- (33) 中島端の明治四四年十一月二六日付閔若之助宛書簡。閔若之助は、注(1)の中島若之助と同一人物である。閔家の婿養子となつて改姓した。彼はキリスト教に入信し、牧師となつた。
- (34) 中見立夫「川島浪速と北京警察学堂・高等巡警学堂」(近きに在りて) 第三九号 二〇〇一年八月)、韓延龍主編『中国近代警察制度』(中国人民公安大学出版社 一九九三年)
- (35) 「中島比多吉君」(『続対支回顧録』下巻 大日本教化図書 昭和十六年)
- (36) 中島端撰「綽軒中島先生遺愛碑」の中には、「性又善く疾む」と記してある。
- (37) 郡司勝義「『斗南先生』逸事—中島敦の伯父・中島竦」(「ちくま」一九七六年二月)
- (38) 二葉亭四迷(長谷川辰之助)は、東京外語学校の同窓生川島浪速の紹介で、北京警察学堂の提調代理として、事務会計の総括に当つている。彼の日記に中島竦の採用とその仕事とについて詳しく記されている(一九〇三年三月二七日。月給は工巡局と学堂とで半分ずつ負担の計八十元、半年間の期限、旧暦三月一日採用に決定。以下、七月まで計二〇回にわたり記述がある)『二葉亭四迷全集』六巻(岩波書店 一九六五年)参照。
- (39) 中島端の明治二七年四月二日付中島若之助宛書簡
- (40) 明治三七年三月二九日付中島田人宛書簡。「特別任務班」については、児玉源太郎參謀次長が、袁世凱と密接な関係をもつ青木に説いて、袁世凱の協力を取りつけて実行させたものである(「青木宣純君」「対支回顧録」下巻 対支功労者伝記編纂会 昭和十一年)。ただ、中島竦の明治三七年五月二〇日付中島田人宛書簡に、「其筋ニテ此計画アリシハ頗ル秘密ナリシカドイツシカ露犬ノ知ル所トナリテ」とある様に、口
- (29) 注(28)に同じ。
- (30) 「支那の将来(四)」(六三五号 大正三年八月一日)。羅振玉「斗南存稟序」。
- (31) 「恣意任性、不知大体」の劾奏を受けて、吏部で処分を議するよう諭旨が出て、吏部は「革職」を奏上した(『政治官報』宣統元年十月十四日)。

- シア側の警戒も厳しくなり、決死隊員の中に犠牲者も出た。中島端は「袁世凱の日本觀」（六二六号 大正三年三月一五日）で、日露が相争つて双方とも傷つき共に失敗に帰することを願い、「日本社士の鉄道破壊に赴くや、彼（袁世凱のこと—後藤注）は竊に護符を一行に頒ち与へしも、一面又露人に暗示して予じめ之に備へしめし」との、二股をかける策を弄したことを暴露している。
- (41) 明治三七年六月二一日付中島田人宛書簡では、「此書状ハ諸兄弟へ御示シ可被成候」とある。
- (42) 明治三七年九月十七日付中島田人宛書簡
- (43) 明治三七年十月十九日付中島田人宛書簡
- (44) 明治三七年十月三一日付中島田人宛書簡
- (45) 村山前掲書による
- (46) 松平康国撰文「玉振中島君碑銘」（前掲『中島敦研究』所収 筑摩書房 一九七八年）
- (47) 森鷗外「羽鳥千尋」
- (48) 吉村彌生「中島家の人々」（『中島敦全集』別巻 筑摩書房 二〇〇二年）によると、明治三五年生まれの彼女は、十歳から二十歳頃まで、中島端と久喜で同居したという。端の老母「きく」は高齢とはいえ達者で、慈愛深く物分りのよい人であつたらしい。吉村彌生は二十歳頃になつて姉に聞かされるまで、「きく」を実の祖母と思つていたという。
- 老母「きく」の大正三年一月十三日付関若之助宛書簡には、老母が女中の手助けを借りながら、「呉々も敦事ハまま母の手ニハかけ不申」と、敦の母に伝えてくれるようにとの頼みが記してある。だとすると敦は、端が『支那分割の運命』の執筆にかかる頃から、大正四年の小学校入学近くまで、幼児期の丸四年半ほど端と同居したことになる。
- (49) 安藤彦太郎「宮島大八と二葉亭四迷」（竹内好・橋川文三編『近代日本と中国』上 朝日新聞出版社 一九七四年）

- (50) 「支那研究の注意」（六九九号 大正六年二月十一日）
 「支那の将来（一）」（六二七号 大正三年四月一日）
 「余輩の支那觀」（六九五号 大正五年十二月十五日）
 「支那の将来（五）」（六三六号 大正三年十二月十五日）
 「余輩の支那觀」（六九一号 大正五年十月十五日）
 「支那の将来（九）」（六四一号 大正三年十月十五日）
 「余輩の支那觀」（六九〇号、六九一号 大正五年十月一日）
 「支那の将来（九）」（六四一号 大正三年十月十五日）
 「余輩の支那觀」（六九五号 大正五年十二月十五日）、
 「支那研究の注意」（七〇〇号、七〇一号、七〇二号、大正六年三月一日、三月十五日、四月一日）
 「支那の将来（続稿の三）」（六四五号 大正三年十二月十五日）
 「余輩の支那觀」（六九五号 大正五年十二月十五日）
 「支那研究の注意」（六九九号 大正六年二月十一日）
 「支那研究の注意」（七〇〇号 大正六年三月一日）
 「支那研究の注意」（六九九号 大正六年二月十一日）
 「分割運命後序」（『斗南存藁』所収）、「支那の将来（五）」（六三六号 大正三年八月十五日）
 勿堂「目下の二大滑稽」（六五四号 大正四年五月一日）
 中島敦「斗南先生」

付記 本稿は一九八七年夏の信州大学人文学部公開講座のために準備したものである。その過程で、中村忠行、増井経夫、村山吉廣、樽本照雄の諸先生から、貴重な御教示を頂いた。記して謝意を表すとともに、成稿が大幅に遅れ、中村、増井両先生にお眼にかけることができなかつたのを、深くお詫び申し上げる。

（完）